

昭和62年度日本気象学会奨励金受領者選定理由書

受領者: 入田 突 (岐阜地方気象台)

研究項目: メソスケールのレーダー・エコー解析および
雷雲の発達と移動機構について

選定理由: 入田会員は、昭和39年三重県立津高等学校を卒業後、名古屋地方気象台に就職したが、以来津地方気象台を皮切りに数多くの気象官署を転任し、その間、観測および予報の多忙な現業勤務のかたわら、終始熱心な調査研究に携わり、気象現象の解明に取り組んできた。

昭和48年、東京管区気象台に勤務しながら東京電機大学工学部を卒業した同会員は、福井地方気象台勤務となり、レーダー観測に従事したが、早速手掛けた精力的な研究は「高気圧性循環を伴ったうず状エコーの解析」(1974: 天気, 21, 207-213)としてまとめられ、東尋坊レーダーで観測されたアンティ・サイクロニックなうず状エコーの形成から消滅までの過程を示した。

昭和50年には、同僚と一連のうず状エコーの特性や一般場の特徴について調査研究し、「うず状エコーの解析」(1976: 天気, 23, 255-266)を発表している。この中で、日本海に現われる典型的なうず状エコーについて、その形成過程を詳細に調査し、東進するニコー群の風上端に発生するエコー・セルが、低気圧性の曲率に配列し、その先端付近に周辺のエコー域を巻き込みながら、うず状ニコーを形成することを示した。

昭和54年から55年にかけては、デジタル化されたレーダー(名古屋)を使ってエコーの発達・衰弱の量的解析を行っており、その成果は「アメダス風から求めたうず度とレーダー・エコーの発達・衰弱について」(1980: 天気, 27, 635-641)および「レーダー・エコーの発達・衰弱について」(1980: 研究時報, 32, 88-89)としてまとめられている。

同会員は、上記のほかには気温の予測や雷雨予測など、予報業務にも直接関連した多くの成果を研究時報や研究会誌に著わしており、最込は、短時間強雨につながる雷雲を中心としたメソスケール現象の解明に関する研究を計画し、精力的に取り組んでいる。このような地域に密着した地道な研究は今後の気象学および気象業務の発展に大きく寄与するもの

と考え、本学会はここに奨励金を贈るものである。

受領者: 三品 博 (釧路地方気象台)

研究項目: 釧路地方気象台管内における最低気温分布の
地域特性の研究

選定理由: 三品会員は、昭和38年に帯広三条高校を卒業し、帯広測候所糠平気象通報所に採用され、その後、森測候所、網走・稚内両地方気象台を経て、現在は釧路地方気象台にて予報官として業務に従事している。この間、業務のかたわら地域に密着した気象特性の調査研究に熱心に取り組んできている。

まず、網走地方気象台勤務中には、網走管内における冬期間の最低気温分布と地形との関連について調査し、最低気温の低い順序は、ほぼ盆地、谷間、平地、高台の順であることを明らかにした。

稚内地方気象台勤務中には、オホーツク海高気圧と宗谷管内の日照時間との関連について研究し、上層の湿度分布は、オホーツク海高気圧の位置によって差があることおよび上層の湿度の高低は、層雲の消散に大きく関連していることを見いだした。これらの研究成果は、予報業務の参考に供されている。

同会員は、また宗谷管内における降雪の地域特性についても検討を行い、降雪の地域差は、低気圧の経路と850 mbの風系によって影響されていること、降雪量の多少は、温度差が良い目安となることなどを見いだしている。更に、宗谷管内における冬期間の異常低温の発現は、二種類の態様に分類可能であることを明らかにした。

上記および関連の研究は、研究時報および管区研究会誌等に発表されている。三品会員のこれまでの研究は、地域気象に密着しており、その成果は、地域気象の解明に多くの貢献をしており、その一部は、予報業務の参考に供されている。

同会員は、現在、これまでの研究経験をふまえ、釧路地方気象台管内の最低気温分布の地域特性の研究に取り組んでいる。

本学会は、同会員の研究が、今後一層発展し、それが気象学の発展に寄与するものと考え、ここに奨励金を贈るものである。

受領者：榊原保志^{さかきばらやすし}（東京都目黒区立第二中学校）

研究項目：気象観測に基づく教材システムの研究

選定理由：榊原会員は、昭和51年3月東京理科大学理学部物理学を卒業後、東京都足立区立第七中学校に勤務、その後目黒区立第二中学校に転任し混在にいたっている。向学心が強く勤務のかたわら、昭和52～54年には東京理科大学専攻科（物理学）で学んでいる。

理科の領域の中で、特に気象教育に関心を抱きはじめたのは昭和56年頃に行った「草加松原団地における小気候学的調査——ヒートドライアイランドを中心に」がきっかけになったようである。その後も生徒による共同観測による「後楽園球場の小気候調査」など身近で関心の高い対象に対しての気象観測に意欲を燃やしてきた。

理科教育にあっては生徒達が直接に自然に接触する場面が準備されることの要請が高いわけであるが、気象領域においては、生徒による実地観測の場面は必ずしも多くないのが現状である。榊原会員はその点に目をつけ、気象領域の教材システムの問題点（測器整備や観測上の困難点、中学校の教材とし

て適切な気象現象の選択、等値線の意味と解析法）を見出し、それを克服するためにいくつかの工夫をした。その1は電動式紙アスマン通風乾湿計の製作と使用による観測の実践、その2は校庭や校舎内の温度分布の調査、その3は等温線解析のためのパソコンソフトの開発等である。以上を手がかりとして気象観測をベースにして、気象教材システムの充実化を一層進めようと努力している。

学校教育における主人公は教師ではなく生徒であることは言を待たない。教師は生徒のための教材や学習環境の条件整備と適切な指導法が肝要である。教師個人の研究が先行し、生徒がデータ収集にかり出されるということでは本末転倒である。

この教材化が生徒にとってどのような価値があったのか、そして何をどのように改善すべきかを配慮し、教育評価が正確に行われることが重要である。今後、ハードウェアから一歩抜け出し、生徒自身がこの教材により何を学ぶのかの評価、つまりソフトウェアレベルの研究にまで高めることを期待し、本学会はここに奨励金を贈るものである。



IAMAP business meeting

カナダのバンクーバーで、IAMAPの business meeting が開かれました。まず、人事に関しては、4年任期で、President（委員長）

G.B. Tucker（オーストラリア）

Vice-President（副委員長）

R.G. Soulage（フランス）

Vice-President（副委員長）

K. Labitzke（西独）

Secretary-General（書記長）

M. Kuhn（オーストリア）

執行委員 I. Hirota（日本）

P.K. Das（インド）

O. Avaste（ソ連）

X.-J. Zhou（中国）

G. Ohring（米国）

となった。また、そこで提案された主要な symposium

の topic は、(1) GWE—10年後、(2) 大気の微量成分、(3) 全球エネルギー・水循環、(4) 外力に対する中層大気の応答、

であった。その他にも、(1) 極域の remote sensing、(2) 大気透明度、(3) 境界層のパラメタリゼーションと large-scale モデル、微量成分の remote sensing、夜光雲、nowcasting、エアロゾルおよび雲の気候への影響、メソスケール温帯低気圧、大気汚染、金星大気、非線形力学、および、全球データセットなどが、あげられていた。これらの symposium については、IAMAP プログラム委員会が調整を行う予定。

さらに、IAMAP は、IGBP に積極的に取り組む予定で、その中心的なプログラムは、“地表面の植生と大気の相互作用”である。その他の主要な計画は、“外力の変化に対する中層大気の応答”である。

(AMS News letter より)